
正夢

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正夢

【Nコード】

N6664J

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

このうえなく淫靡な夢を見た真理子。それがどうしてかわからないでいると夫の保正が夜に食事に誘ってきてその後で。夫婦の夜のお話です。

第一章

正夢

朝起きて思ったことは。何故あんな夢を見たかということだ。

あんな夢を見たのははじめてだった。顔の見えない誰かと肌を重ね淫蕩な交わりの中に溺れる。確かに淫らな夢はこれまでも見てきた。だがあそこまで淫らな夢を見たのははじめてだったのだ。

「どうしてかしら」

自分に問い聞かせもする。

「どうしてあんな夢を」

だが答えは出ることはない。どうしてもわからないままにベッドから起きて服を着替える。そうしてそのうえで朝食の仕度をはじめるのであった。

丁度トーストもハムエッグも焼けたところで夫が起きてきた。夫の保正はまだ半分寝ている顔である。その顔でリビングに出て来てまずこう言ってきた。

「おはよう」

「おはよう」

それぞれ挨拶をする。夫に顔を向けながらそのハムエッグを皿に入れる。二人分だ。

それに昨日の夜のサラダの残りを出しそれにドレッシングをかける。ミルクも出してそれを朝食とするのだった。

「ふっ」

テーブルに着くと溜息を出すのだった。すると保正はすぐに彼女に問うてきた。

「どうしたんだ？真理子」

「何でもないの」

こう夫に返すのだった。

「ちょっとまだ眠いだけ」

「何だ、そうなのか」
「昨日結構寝たのだけれどね」
「疲れてるんじゃないのか？」
保正はトーストを両手の指で千切りながらこう言ってきた。
「それは」
「そうかしら」
「身体はともかく心がってやつじゃないのか？」
そうではないかというのである。夫はようやく目が覚めてきたという感じだった。そのトーストをコップの中のミルクに軽く浸してそのうえで口の中に入れていいる。
「それだとな」
「それだと？」
「気分転換したらどうだい？」
「今度の言葉はこれだった。」
「気分転換。どうかな」
「気分転換ね」
「今夜食事でもどうだ？」
そして食事を提案してきたのである。
「何処か洒落たレストランにでも入ってな」
「レストランね」
「ほら、この前言ってたじゃないか」
妻に対してさらに言ってきた。今度はハムエッグを食べている。
「スペイン料理の評判のいいレストランがあるって」
「あそこね」
「僕の会社帰りに。今日は早いし」
「それで待ち合わせてなのね」
「それでどうだい？」
ここまで話してまた行ってきたのであった。
「いい気分転換になるだろ」
「そうね。いいわね」

夫のその言葉に頷く真理子だった。頷きながらサラダにフォークを入れる。

そしてそのレタスとスライスされたトマトを口の中に運びながら彼女も言うのだった。

「スペイン料理好きだし」

「そうだろ？じゃあ丁度いいじゃないか」

「わかったわ」

夫のその誘いに乗るのだった。

「じゃあ今夜ね」

「そのレストランの最寄の駅で待ち合わせて」

「そうしましょう」

こう言葉を交えさせて今夜の予定を定めた。そのうえで朝食を食べて身支度を整えた夫を送り出して自分も歯を磨いて顔を洗った。

それから家事に取り掛かりながらまた夢のことを思い出すのであった。

「あんな夢を見るなんて」

夢の中の彼女は普段の彼女とは違っていた。その顔の見えない相手のあらゆる部分をまさぐり接吻し舐める。そして自分も相手の愛撫を受けその中に溺れ絶頂を迎える。これまで経験したことも考えたこともない程に淫らな自分がそこにいたのである。

そのことに戸惑わずにはいられなかった。家事をしながらもそのことが離れない。家事が終わり休憩に入っても同じだった。やはりあの夢のことを考えてしまう。

どうしても離れないので少し身体を動かすことにした。運動不足解消の為にランニングをすることを日課にしているのである。それに入ったのだ。

赤いジャージに着替え茶色がかかった黒髪を後ろに束ねタオルを首に置いてそのうえでマンションの部屋を出る。そうしてランニングに出た。

第二章

道を走り公園の緑を見る。暫くあの夢のことは忘れていた。しかしその公園の緑の森が目に入るとまた思い出してしまったのである。

「あの中で」

よくそうした話で聞くことを思い出したのである。

「ああしたことを」

するのだろうかと思ってしまうたのである。

すると顔が真っ赤になつてしまったのが自分でもわかった。慌ててそうした淫らな考えを頭の中から消し去つてしまおうとする。

走るのを速めて何とかそれを忘れようとする。しかしそれは果たせず結局走っている間ずっとそのことばかりを考えてしまった。家に帰つてシャワーを浴びても頭の中から離れず昼食を食べても午後
の家事をしてもずっと同じであつた。

「何なのかしら」

いい加減それが不思議に思えてきた。

「そもそも誰なのかしら、あれは」

夢の中のその顔の見えない男のことも考えた。

「あの人かしら」

まず考えたのは夫だつた。

「浮気なんて」

そういうことは考えたこともない。彼女は潔癖症の気がありしかも実際のところ夜については淡白な方である。それは夫も同じである。

だからこそ余計に不思議だつた。そうしたことは当然知っている。しかしあそこまで淫らな自分は想像もしたことがなかった。何故あんな夢を見たのか不思議だつたのである。

どうしてなのかわからないまま時間だけが過ぎていく。そうして遂に行かなければならない時間がやって来たのであつた。

「時間ね」

それで化粧をして髪を整えスーツも着る。香水もかけて身なりを完全に整えた。そのうえで家を出て待ち合わせのその駅にまで向かった。

駅に着いて暫くすると夫が来た。スーツにコート姿である。

「待ったかな」

「いえ、全然」

儀礼的にこう答えた彼女だった。

「今来たところよ」

「そう、それならよかったよ」

それを聞いてまず微笑んだ保正だった。

「それじゃあ今から」

「ええ。そのレストランね」

「予約はしてないけれど」

このことも言ってきたのだった。

「大丈夫だよね」

「いけると思うわ」

確証はないがこう答えた真理子だった。

「そんなの混むお店じゃないみたいだし」

「そう。だったら」

「行きましょう」

こう夫に勧めた。

「今からね」

「うん、それじゃあね」

こうしてレストランに向かった。レストランは込んでおらず二人は楽しい夕食の時を過ごすことができた。ワインも楽しみ酒にも酔った。そうして店を出るとであった。

「おや」

「どうしたの？」

「いや、時間だけねどな」

自分の腕時計を見ながら妻に述べてきた夫だった。

「まだそんな時間じゃないな」

「早い」

「八時だ、まだ」

それ位だというのである。

「時間はまだまだあるな」

「そうなの。それでも」

ここでふと。その昨夜の夢のことを思い出した真理子だった。そしてそのことを思い出しながら夫に対してこう言ったのである。

「まだ帰るのは早いんじゃないかしら」

「早い」

「ええ、早いわ」

また言う彼女だった。

「そう思っけれど」

「じゃあ何処に行くんだ？」

「ねえ」

そしてその夢に従うようにだ。まずは夫にもたれかかって。そのうえで告げたのである。

「二人だけになれる場所に行きましょう」

「という」

「わかるでしょ？」

上目遣いに夫を見ての言葉である。それを告げてみせたのである。

「だからね」

「と言われても」

「ホテルは何処でもいいわ」

さらに具体的な言葉になった。

「だからね」

「そうか。そこまで言っのなら」

「行きましょう」

真理子の方から誘った。そのうえでホテルに入る。そのホテルは

最近流行の洒落たホテルだった。まるで何処かの高級ホテルに見えなくもない。

第三章

その中の一室に入る。すると保正はシャワーも浴びずに服を脱ぎはじめた。真理子はそんな夫を見て少し驚きを感じてしまった。

「シャワーは」

「いいよ」

服を脱ぎ続けながらそれはいいというのである。

「それはね。もういいよ」

「いいって」

「それよりも」

そして妻にも言ってきたのであった。

「君も脱いでよ」

「私も？」

「何かその気になってきたからね」

だからだというのである。

「僕はだけれど」

「あなたは」

「君はどうかな。何ならお風呂の中で」

今度の言葉はこれ以上はないまでに直接的な言葉だった。

「それでもいいけれど」

「それは」

少し抵抗を感じた真理子だった。風呂場はこうしたホテルの常で鏡張りになっていてその中がよく見える。今はダブルベッドの置かれている場所にいるがそこから実によく見える。それがまたこの手の場所に共通の独特の淫靡なものも醸し出しているのであった。

その淫靡さを感じてだった。彼女は夢のことをさらに思い出して。そのうえで夫に答えた。

「そうね」

「いいかな」

「ええ」

彼の問いにくくりと頷くのだった。

「それじゃあ」

そうしてであった。服を脱いで自分から灯りを消して夫を抱き締めベッドに押し倒して。二人だけの淫らな宴に入るのであった。

意識してはいた。だがその動作は自然だった。夫に対して自分が夢に見たそのことをそのまましていく。すると夫もそれに応えて彼女が夢で見たそのことをしてきたのである。それこそがまさに彼女が夢で見たそのことに他ならなかったのであった。

そしてそれが終わってからだった。一息ついたベッドの中で。彼女は夫に対して告げた。

「はじめてよ」

「こうした場所に来るのが？」

「それははじめてじゃないじゃない」

夫の今の言葉には思わず笑って返してしまった。

「結婚する前は二人で何度も来たじゃない」

「そうだったかな」

「このホテルじゃないけれどね」

「そうだろ？じゃあ何がはじめてなんだい？」

「ここまでしたことがよ」

それがはじめてだというのである。

「なかつたわよね、それは」

「そうだったね。それは僕もだよ」

「あなたもなの」

「少なくとも覚えている限りはね」

そうだったというのであった。

「そして」

「そして？」

「こんな君もはじめてだったよ」

今度は真理子に対する言葉であった。

「ここまで乱れた君はね」

「そうよね」

夫に言われてこのことをさらに自覚するのだった。ベッドの中で満ち足りた気持ちで言葉のやり取りをしている。それは夢と重なり合っでもいた。

「それはね」

「何でかな」

また言う保正だった。

「僕もここまでするなんて」

「私がしたからよね」

「それもね。不思議だよ」

二人共天井を見ている。そこは鏡張りになっている。その鏡を使っってお互いを見ながらそれぞれ話す。二人共情事の後特有の満ち足りた、それでいて何処かけだるい顔になっていた。

第四章

「君があそこまで乱れるなんて」

「夢で」

ふと夢のことを夫に出したのだった。

「夢で見たから」

「夢で？」

「ええ。夢で見たのよ」

夫に対して言葉を出し続けていく。

「だから自然に。それで動いてしまつて」

「そうだったんだ」

「考えてみれば本当に不思議ね」

彼女もまた不思議という言葉を口に出したのであった。

「こつしたことになるなんて」

「そうだね。夢が現実になつたんだ」

「こんな夢見るなんて思わなかつたけれど」

これは実際にそうであった。今でも半分以上信じられないでいる。

「私がこんな、ね」

「僕もね。けれど」

「けれど？」

「よかつたよ」

これが夫の言葉であつた。そして考えでもあつた。

「今までになかつたことだからね」

「そうね。よかつたわ」

それは彼女も同じだった。今までになかつたことだが実際に経験してみるとだつた。実に満足するものであつたのは間違いなかつた。

「とてもね」

「また。しようか」

夫の方から言つてきた。

「今から。どうする?」

「そうね」

今はそのけだるさの残る顔で応える彼女だった。

「それじゃあ」

「ただ」

また言ってきた夫であった。

「その相手だけれど」

「相手!?!」

「君じゃなければ駄目だよ」

こつ彼女に告げてきたのだった。そのけだるい顔を彼もそのままにしている中で。

「僕は君じゃなければね」

「私もよ」

そしてそれは自分もだと。真理子も答えた。

「相手はね。あなただけよ」

「そうだよね。まさかこんな気持ちになるなんて」

「わかったわ」

そして真理子は言うのだった。

「あれはあなただったのよ」

「その夢の相手だよね」

「そうよ。あなただったのよ」

鏡に映る夫を見ながらの言葉である。

「それはね」

「そうだったんだ」

「だから私は今」

真理子は言葉を続けていく。

「満足できたのね」

「実は僕もね」

保正もここで彼女に言ってきたのだった。彼女と同じく鏡から彼女を見ながら。そのうえで話すのだった。

「満足しているよ」

「私だから？相手が」

「そうだよ。またね」

「ええ、またね」

二人でまた言っていく。

「こうしよう」

「そうね。夫婦だし」

二人でこう言い合うのであった。真理子は今まで気付いていなかった自分自身に気付いただけでなく夫の想いにも気付いた。それは夫も同じだった。結果として二人の絆はさらに強く確かなものになった。淫らな夢からはじまったものであってもである。

正夢 完

2009・11・9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6664j/>

正夢

2010年10月8日14時26分発行